ビル・エモット著「20 世紀の教訓から 21 世紀が見えてくる」草思社 2003 年 7 月 31 日刊を読む

重要なのは寛容と自由と実験だ

１．経済学者をはじめとする政策立案者のすべてにとりわけ必要なのは、謙虚になることだ。その他の人びとの場合に、宗教儀式の復活の陰に見られるような謙虚さである。ユートピアへの誘惑は危険であり、複雑な社会や経済や政治を前にしてすべてが解明できると考えることもやはり危険である。実際、それがリベラリズムの哲学の立場となる。上から解決策を押しつけるのではなく、寛容と自由と実験を重んじることだ。

２．市場と資本主義、それに自由そのものを選択するリベラルな考え方は、知的な謙虚さによって動かされている。自由に述べられた見解や何百万という人びとの行動に影響されながら、絶えず繰り返される実験の過程を受け入れるほうが、経済学者、政治家、官僚、経営者、あるいはジャーナリストなどによる委員会が壮大かつ綿密な計画を立てるよりも、適応性に富むよい結果が生まれることが多い。この考え方が謙虚なのは、われわれがいかに無知であるかを認めているからだ。

３．科学によってすべての答えは出ないし、科学技術によって事態が必然的に改善されることもないという認識がリベラリズムにはあり、またそうあるべきだ。組織を管理する一つの正しい方法などないという事実を謙虚に受けとめるべきなのだ。社会学者や心理学者が何を言おうと、社会的な関係をまとめる一つの正しい方法などない。とりわけ、謙虚なリベラリストであるためには、あるパラドックスに気づいていなければならない。政治問題や実際的な問題に一連の解決策を思いついたと考えたとき、われわれが最も用心しなければならないのは、それらを実際にすべて実施する権力を誰かが掌握するかもしれないという考えなのだ。

４．19 世紀のリベラリスト、アクトン卿が次のように語ったのは有名だ。「権力は腐敗を招きやすく、絶対的な権力は絶対に腐敗する」。一般に人びとが記憶しているのは、この言葉の後半部分だ。特に 20 世紀には絶対的な権力による数々の恐ろしい事例が見られたからだ。しかし実際には、むしろ前半のほうが重要だ。そこに含まれる要点、すなわち権力の保有者はときとして意識的に、またときには無意識のうちに、権力を自分のために悪用するという事実は、リベラリストが政府――たとえ民主主義の政府でも――にいだく疑念の裏にあるだけでなく、大企業、労働組合、圧力団体など、権力を集中させるすべてのものにも共通する。人間は完全にはなれないが、政府などの大きな組織でもそれは同じことだ。

5．だからこそ、経済や社会や科学の可能性について正当な楽観主義を奉じながら 21 世紀の最初の数十年間を進むなかで、われわれはあのワイン醸造業者の用心深さを忘れてはならないのである。状況が悪化するのは、ブドウ栽培者を悩ませる偶然や不可抗力のせいだけでなく、人間による多くの行為のせいでもある。それらは意図的にも過ちによってもわれわれの自由と選択の自由を脅かし、どんなに成熟した民主主義社会でも、虚偽の確実性によってわれわれを新しい危険な方向に導きやすい。フランク・ボームが描いたオズのエメラルドの町は、そうしたまやかしや虚偽の確実性にあふれていた。最終的にそうした多くのまやかしが 20 世紀末にかけて露呈し、リベラリズムがその影響力をふるいはじめたという事実は、21 世紀に関して楽観できるよい根拠となる。まやかしを追跡するのは、本質的に用心深い人間の職業であるジャーナリズムの基本的な目的の一つだ。追跡は今後もつづけなければならないのである。

P.404 ～ P.406

［コメント］

知日派のエコノミスト編集長ビル・エモット氏の基本的な考え方がよく示されている。「寛容」は「自由」の大前提であり、「自由」な社会のためには「実験」が欠かせないと私は考える。

現代社会の抱える大切なテーマを一つ一つ丁寧に書き記している本書は、ものごとの本質を考える際に参考になる。ジャーナリストとして知性に溢れた著作だ。

－ 2009 年 2 月 9 日林明夫記－